

農業技術情報

令和5年7月15日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター

十勝東部支所 015-572-3128

J A 十勝池田町 572-3131

高島支所 573-2111

池田町産業振興課 572-3118

作物名	遅速 日数	生育状況			農作業状況
秋まき小麦	+6	草丈 72.1 (77.6) cm 穂長 8.9 (8.9) cm 穂数 575 (673) 本/m ²	成熟期 7/15 (7/21)		
ばれいしょ	+4	茎長 68.2 (85.9) cm 茎数 3.9 (3.6) 本			
大豆	+11	茎長 59.3 (45.6) cm 葉数 9.1 (6.6) 枚	開花始 7/8 (7/18) 開花期 7/9 (7/20)		
小豆	+9	茎長 21.3 (16.1) 葉数 7.8 (5.1)			
菜豆(金時)	+9	茎長 51.3 (35.4) 葉数 4.2 (3.8)	開花始 7/4 (7/12) 開花期 7/5 (7/14)		
菜豆(手亡)	+9	茎長 47.1 (34.9) 葉数 7.2 (6.1)	開花始 7/8 (7/16) 開花期 7/9 (7/18)		
てん菜(移植)	-	草丈 60.5 (59.0) cm 葉数 18.9 (22.7) 枚 根周 24.5 (23.9) cm			
てん菜(直播)	+6	草丈 46.5 (52.8) cm 葉数 21.1 (18.2) 枚 根周 20.2 (17.8) cm			
牧草	+4	2番草 草丈 31.8 (27.8) cm			収穫期 6/21 (7/3) 収穫終 7/4 (7/18)
サイレージ用 とうもろこし	+6	草丈 201.9 (149.9) cm 出葉数 16.0 (13.5) 枚			
たまねぎ	+8	草丈 66.0 (70.9) cm 生葉数 8.9 (7.9) 枚 葉鞘径 19.1 (17.5) mm 球径 4.97 (2.85) cm			

畑作

豆類の生育が進んでいるため、タイミングを逃さないよう適期防除を行ってください。

<秋まき小麦>

1 収穫後の管理

(1) 麦稈の処理

ア 立枯病など土壤病害が発生したほ場では、病気のまん延を防ぐため、麦稈をすき込まずに持ち出しましょう。また、2～3年は麦の作付けを避けましょう。

イ 麦稈をすき込む場合は、窒素流亡による環境負荷を低減するため、後作に作物や緑肥を栽培する場合を除き、窒素肥料の施用を避けましょう。

ウ そば・麦異品種の後作に麦の作付けは避けてください。やむを得ず作付けする場合は、麦稈は搬出しロータリーをかけ、出芽した後に、プラウで埋設して下さい。

(2) 多年生雑草対策

シバムギ・レッドトップ・ギシギシなど多年生雑草が多い小麦畑が散見されます。多年生雑草対策には耕起前の除草剤茎葉処理が有効です。

【多年生雑草の処理方法（グリホサート系除草剤）】

小麦収穫 → 雑草が15cm以上に再生 → 除草剤散布 → 耕起

※少水量散布時は専用ノズルを使用する。

※通常2～7日で効果が発現し、効果完成までさらに日数を要します。

表1 耕起前の除草剤例

農薬名	処理方法・使用時期	薬量 (ml/10a)	回数	注意事項
ラウンドアップマックスロード	耕起前・雑草生育期 水量25～100ℓ	200～500	3回	<ul style="list-style-type: none"> ・多年生雑草が15cm以上再生後に散布。 ・展着剤を加用しない。 ・散布後6時間は降雨がない日に散布。（ラウンドアップマックスロードは1時間、タッチダウンIQは3時間） ・周辺作物に飛散しないよう注意するとともにドリフト低減ノズルの使用が望ましい。 ・少水量散布は専用ノズルを使用。
タッチダウンIQ	多年生イネ科雑草、 耕起3日以前（雑草生育期）	500～1,000	1回	
クサトリキング	耕起前まで 雑草生育期草丈30cm以下	250～500	3回	

(3) 収穫跡地の後作緑肥栽培について

地力の維持増進のため、小麦収穫跡地には緑肥作物を作付けしましょう。後作にながいのも・ごぼうなどを作付けする場合は、キタネグサレセンチュウ対策のため、えん麦野生種が有効です。えん麦野生種には、ばれいしょのそうか病軽減効果や小豆落葉病の抑制効果もあります。表2を参考に、ほ場の条件に応じた緑肥を選定しましょう。

表2 小麦後作緑肥の栽培例（北海道緑肥作物等栽培指針）

緑肥作物名	は種時期	は種量 (kg/10a)	施肥量 (kg/10a)			すき込み時期
			窒素	リン酸	カリ	
えん麦（一般）	8月上～中旬	15～20	4～6	5～10	0～5	10月中旬 ～10月下旬
えん麦野生種 （ソイルセイバー、サイヤー）		10～20	5	5	0～5	
シロカラシ類（キカラシ）※1、 2	8月上～下旬	2	5～8	5～10	0～7	
ひまわり（りん蔵）※2	8月上～下旬	1.5～2	4～6	8～10	0～10	

※1・そうか病発生ほ場では前作として用いない。

・根こぶ病発生の恐れがあるので、前作又は後作にアブラナ科野菜の作付けはしない。

※2 キタネコブセンチュウやキタネグサレセンチュウの密度を高めるので、後作物の選定に注意する。

<ばれいしょ>

1 疫病の防除について

本年は疫病の発生期が「早」、発生量は「並」と予想されています（北海道病害虫防除所「7月予報」）。夏疫病の発生が確認されているため、夏疫病に効果のある剤を選定してください。特にほ場に入れない状況が予想される場合は、Wインターバル（14日間隔）効果のある薬剤※の使用を検討してください。

表3 疫病の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	効果の発現	対象病害 (倍)		
					夏疫病	菌核病	塊茎腐敗
ホライズンDF	1,000~2,500	14日	4回	予防治療	1,500	—	—
プロポーズ顆粒水和剤	750~1,000	7日	5回	予防治療	1,000	—	750~1,000
エキナイン顆粒水和剤	2,000	7日	4回	予防治療	—	—	—
フロンサイドSC	1,000~2,000	7日	4回	予防	2,000	1,000	1,000
ランマンフロアブル	1,000~2,000	7日	4回	予防	—	—	1,500
レーバスフロアブル	1,500	7日	2回	予防治療	—	—	1,500

※「リライアブルフロアブル 800 倍」、「プロポーズ顆粒水和剤 750 倍」、「ライメイフロアブル 2,000 倍」、「レーバスフロアブル 1,500 倍」、「ランマンフロアブル 1,000 倍」、「フロンサイドSC 1,500 倍」(平成 25 年度指導参考)。

2 軟腐病の防除

高温多湿条件が続くと軟腐病が発生しやすい環境となるため注意しましょう。初期防除の徹底に心がけ、また生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

表4 軟腐病の防除薬剤例

農薬名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)	効果の発現
スターナ水和剤	1,000	7日	5回	予防・治療
バクテサイド水和剤	750~1,000	7日	5回	予防・治療
マテリーナ水和剤	1,000	7日	3回	予防・治療
カスミンボルドー カッパーシン水和剤	500~800	7日	3回	予防・治療
マスタピース水和剤	1,000	前日	—	予防

※1 オキシリニック酸に対する低感受性菌が出現している地域があるので、連用は避ける。
また、オキシリニック酸を含む剤の使用は合計5回までとする。
※2 ストレプトマイシンを含む剤の使用は合計5回までとする。

3 アブラムシ類等防除

本年のアブラムシの発生は発生期が「やや早い」、発生量は「やや多い」と予想されています(北海道病害虫防除所「7月予報」)。また、オオニジュウヤホシテントウも発生しております。害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。

表5 害虫防除薬剤例

	農薬名	対象害虫		使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
		アブラムシ類※	オオニジュウヤホシテントウ			
7月4週	アドマイヤー顆粒水和剤	●(ジャガ/モモ/ワタ)	●	5,000~15,000	14日	2回

4 茎葉処理

(1) 薬剤処理による方法

茎葉枯凋剤の散布は塊茎が目標の大きさに達した時期で晴天無風の日を選んで散布してください。

表6 茎葉枯凋処理剤

農薬名	使用量 (ml/10a)	水量 (L /10a)	使用時期	使用回数 (以内)
デシカン乳剤	250～450	100	茎葉黄変始～収穫3日前まで	2回

※接触剤のため茎葉にまんべんなく薬剤を付着させる。

※茎葉黄変期前に使用した場合、枯凋が不完全になる場合がある。

※処理後2～3時間以内に、降雨が予想される場合には使用を避ける。

※生理的ストレスにより維管束褐変を生じやすいので、土壌が極端に乾燥しているときは使用を避ける。

※散布の際にはドリフトを起こさないように注意する。

(2) リーフチョッパーによる方法

リーフチョッパーを使用する場合は以下のことに注意してください。

- ・茎葉処理作業は茎葉黄変期後の好天時に作業する。
- ・塊茎の損傷や緑化防止のため、刈取り高さは培土を崩さないよう地表から余裕をもたせて処理する。
- ・後部に石れきが飛散しやすく危険なので、周囲に人がいないことを確認後処理する。

<豆類>

1 大豆のべと病防除

「黒大豆」はべと病抵抗性がないため、特に発生状況に注意し防除を実施してください。その他の品種についても要防除水準に達した場合は防除が必要です。開花始に上位葉を確認し、適正に防除をしましょう。

べと病の要防除水準

開花始の上位葉の病斑面積率2.5%以上（病斑個数30個/葉、葉全体に病斑）

防除時期の目安

開花2～3週間前に要防除水準に達した場合

⇒ 要防除水準に達した時期とその2～3週間後の2回防除。

開花始に要防除水準に達した場合

⇒ 開花期1回の防除

開花始に要防除水準に達していない場合 ⇒ 開花期1回防除が必要（黒大豆）

表7 大豆べと病の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
プロポーズ顆粒水和剤	1,000	21日	2回
フェスティバルC水和剤	600	7日	3回
ランマンフロアブル	1,000~2,000	7日	3回

2 大豆の菌核病防除

本年は開花始が7月8日と平年より10日早まっています。防除のタイミングは開花始後10~15日目に1回目の散布、2回目以降は10日毎に防除しましょう。

表8 大豆菌核病の防除薬剤例

回目	目安時期	薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	備考
①	開花始の10~15日後 (R5: 7月20日前後)	トップジンM水和剤	700~1,000	14日	4回	紫斑病に登録あり
②	①の10日後	ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000	7日	3回	紫斑病に2000~4000倍で登録あり

3 マメシクイガ・カメムシの防除(大豆)

開花期が7月9日と平年より11日進んでおり、莢伸長期も早まることが予想されます。1回目防除の目安は、①成虫初発と②莢伸長始（およそ半分の株に2~3cmの莢が認められた日）両方が確認されたら、その6日後頃です。莢伸長始を観察し適期に防除しましょう。2回目防除は1回目の7~10日後に防除します。カメムシとの同時防除が可能です。

表9 マメシクイガ・カメムシの防除体系例

回目	目安月日	農薬名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
①	7月下旬~ 8月上旬	ゲットアウトWDG	3,000	7日	3回
②	①の10日後	スミチオン乳剤	1,000	21日	4回

※甲虫類（コガネムシ等）の食害が目立つ場合は、有機リン剤（スミチオン乳剤）を使用しましょう。

※1回目または2回目にピレスロイド系薬剤を散布するのが効果的です。

4 鱗翅目害虫防除(大豆)

高温条件により発生量が増えてきています。食害面積が20%を超えると5%程度の減収となります。マメシクイガと同時防除可能です。

防除基準

✓ 開花前：幼虫1頭以上、✓ 開花期頃：2頭以上✓ 莢伸長期以降：3頭以上
1株あたり上記の頭数が確認されたら防除実施

5 小豆・菜豆の病害虫防除

(1) 炭そ病の防除（小豆・菜豆）

7月からの多雨・多湿時に発病が多くなります。ほ場を良く観察し、発生初期から防除に努めましょう（表12）。 ※「雪手亡」「絹てぼう」は抵抗性があるため防除不要

(2) 菌核病、灰色かび病の防除（小豆・菜豆）

金時は開花始が平年より9日早まり7月4日、小豆についても平年より9日早まること予想されています。防除のタイミングも例年より早くなりますので注意してください。開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。ほ場の生育に合わせて、適期防除に努めてください。

- ◎ 小豆防除適期 1回目：開花始後7～10日目 2回目：1回目防除の10日後
 - ◎ 菜豆防除適期 1回目：開花始後5～7日目 2回目：1回目防除の10日後
- （金時：R5開花始 7/4、手亡：R5開花始 7/8）

表10 小豆・菜豆 菌核病、灰色かび病を中心とした防除例

回数	薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	炭そ病
1回目	オルフィンフロアブル※1	2,000	7日	3回	—
2回目	ブロードワン顆粒水和剤※2	1,000	14日	4回	○
	または プライア水和剤	1,000	14日	4回	○
3回目	ファンタジスタ顆粒水和剤※3	2,000	7日	3回	○

※1 「オルフィンフロアブル」は炭そ病に効果がないため、炭そ病発生ほ場では「ブロードワン」を使用するか、「トップジンM水和剤」との併用で対応する。

※2 「ブロードワン顆粒水和剤」はチオファネートメチルを含むので、トップジン Mとの総使用回数（4回）に注意。

※3 菜豆類は病害の発生が多い場合、3回目を検討する。

(3) 茎疫病の防除（小豆）

茎疫病が発生しています。連作ほ場や排水の劣る場所で発生している可能性があるため、発病している場合は防除を行ってください。

表11 小豆「茎疫病」の防除薬剤例

農薬名	使用倍率 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
フェスティバルC水和剤	600	7日	3回

(4) アブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除（小豆）

マメアブラムシおよびハダニ類の発生が確認されています。高温乾燥により発生が拡大する可能性がありますので、発生状況に応じて防除してください。

アズキノメイガは産卵盛期の7月下旬から8月中旬頃に2回程度薬剤散布を行ってください。小豆は開花始の7～10日後が散布開始となります。

表 1 2 小豆のアブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	アブラムシ類	ツメクサガ	アズキノメイガ	ハダニ類	マキバカスミカメ
モスピランSL液剤	2,000～4000	14日	3回	●		● 2,000倍		
ゲットアウトWDG	3,000	7日	3回	●		●		
ペイオフME液剤	2,000	7日	3回	●		●		
スミチオン乳剤	1,000	21日	4回	●		●		●
ブレバソフフロアブル5	4,000	7日	2回			●		
トクチオン乳剤	1,000	30日	2回		●	●	●	
ウララDF	4,000	7日	2回	●				
ダニトロンフロアブル	1,000～2,000	7日	1回				●	

<てんさい>

1 褐斑病の防除

連作ほ場等で初発が確認され、例年よりも早い傾向にあります。ほ場の発病状況を確認し、発生初期の防除を遅れず実施しましょう。

また、DMI剤およびカスガマイシン剤は道内で広く耐性菌の発生が確認されています。可能な限り使用回数を低減してください。

表 1 3 褐斑病防除例

防除時期	農薬名	薬剤特性	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
7月下旬	ムケツDX	予治	500～800	21日	3回
8月上旬	① どさんこスター水和剤	予治	500	21日	4回
	または				
	② グリーンダイセンM水和剤 +ホクガード乳剤	予 予治	400～500 1,000～1,500	21日 14日	5回 2回

※マンゼブの総使用回数は5回まで

2 葉腐病の防除

葉腐病は高温多湿条件で多発します。発生が見られたら直ちに防除を行ってください。

表 1 4 葉腐病の防除薬剤例

農薬名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
モンカットフロアブル40	1,000	14日	4回
リンパー顆粒水和剤	4,000	7日	3回

野菜

<たまねぎ>

1 軟腐病など細菌病の防除

高温の影響により軟腐病の発生が懸念されます。高温(25℃以上)多湿条件は軟腐病の発生を助長します。また、高温多湿下での銅剤による防除は薬害が心配されます。必要に応じて抗生物質系殺菌剤を使用するなどして防除を実施してください。

◎薬剤防除以外の細菌性病害対策

- ・茎葉を傷つける恐れがあるため、手取り除草を控える。
- ・軟弱徒長する恐れがあるため、肥大期以降の追肥は控える。(たまねぎ)

◎銅剤使用時の注意点

- ・薬害軽減のため、クレフロン 200 倍を加用し、葉面散布剤との混用避ける。
- ・高温多湿時の使用は避ける。

表 15 たまねぎ病害の防除例

使用時期	薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	成分回数	白斑葉枯病	小菌核病	軟腐病
7月下旬	ファンタジスタ 顆粒水和剤	2,000	収穫前日	5回以内	1回	○	○	
	コサイド3000	1,000 ~2,000	—	—	0回			○
8月上旬	シルベキュア フロアブル	2,000	収穫前日	3回以内	1回	○	○	
	アグレプト液剤	1,000	収穫7日前	5回以内	0回			○
根切り直後	スミレックス 水和剤	1,000	収穫前日	5回以内	1回	貯蔵腐敗病		
収穫前	トップジンM 水和剤	500 ~1,000	収穫前日	5回以内	1回			

2 アザミウマ類の防除

発生量が多くなってきており、小麦収穫に伴い近隣ほ場へのアザミウマ類の侵入が心配されます。たまねぎや葉菜類では小麦収穫前後に防除を実施してください。

茎葉の生育が旺盛な時期です。生育に合わせて薬剤の散布水量を増やしましょう。

表 16 ネギアザミウマの防除例

使用時期	薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	成分回数
7月下旬	トクチオン乳剤	1,000	収穫7日前	4回以内	1回

3 根切り作業のポイント

根切りの目的は変形、裂皮・皮ムケ防止や均一な枯葉、着色促進による品質向上です。適期に根切りを行い、品質低下を防ぎましょう。

○高温（日中の気温が 30℃以上）で日差しの強い日は地上部に露出した部分に日焼けを生じる恐れがあるので、作業を中止しましょう。気温が下がってくる午後3時以降についても、球の温度が高い場合は作業を避けてください。

○この時期の根切りは速度を落とし、根切り機の両サイドにたまねぎがぶつからないよう丁寧に行いましょう。

○枕地を手掘りして寄せる場合は、球を茎葉で覆い、日光が直接当たらないようにする。

○降雨により収穫が遅れた場合は、再度根切りを行い、2次発根・生長を防ぎましょう。

<なかいも(とちち太郎)>

・分肥を行う場合は、7月下旬までに実施してください。また、過剰な分肥や多肥ほ場における分肥は、黄変期の遅れによる乾物率低下の原因になるため注意が必要です。

<かぼちゃ>

1 うどんこ病・疫病の防除

うどんこ病は初発直後までの予防防除が効果的です。

表17 防除薬剤例

防除時期	対象病害	薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
7月下旬	うどんこ病	ポリベリン水和剤	2,000	収穫7日前	3回以内
	疫病	アリエッティ水和剤	400	収穫前日	3回以内

夏場の農作業にあたって

★農薬散布において、「農薬の安全使用基準」を遵守し、散布の高さを低くし周辺作物への飛散防止に努めましょう。

★散布時は、必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかりと覆うようにしましょう。

散布が終わったら、肌の露出部を良く洗い、うがいをしましょう。

★作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。

★水分と塩分をしっかりととり、熱中症に注意しましょう

※薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

※薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。